

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	医療福祉経営学分野
学籍番号		院生氏名	後藤 浩志
通学キャンパス			
論文題目	保険薬局調剤データベースを用いた多剤服用の実態調査とデータマイニングによる要因分析		
審査結果(枠で囲む)	<input checked="" type="checkbox"/> 合格	<input type="checkbox"/> 不合格	
<p><審査結果の要旨></p> <p>1. 研究の概要</p> <p>(1) 意義・目的</p> <p>多剤服用のうち、薬物有害事象のリスク増加、服薬過誤、服薬アドヒアランス低下等につながるポリファーマシーへの対策が課題となっている。その実態については院内調査や少数例の報告が多く、多数例での検討やその要因分析は十分とは言えなかった。本研究では、多剤服用の予測モデルを作成することで、高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015に示された特に慎重な投与を要する薬物(PIMs)リストの有用性評価と、ポリファーマシー対策に資することを目的とした。</p> <p>(2) 方法</p> <p>2016年8月1日から10月31日までに35施設から提供された調剤データ(患者数49,842人、処方箋枚数108,076枚、薬剤数381,480)のうち、慢性疾患として処方期間28日以上薬剤を対象に、データマイニングの1手法である決定木分析を用いて6剤以上の多剤服用となるパターン抽出を試みた。さらに、ロジスティック回帰分析により多剤服用予測モデルを構築した。</p> <p>(3) 結果・結論</p> <p>決定木分析からは薬効分類別の薬剤が説明因子として抽出され、多剤服用に至る9種類の薬剤処方パターンが見いだされた。最も説明力の大きい因子は「消化性潰瘍用剤」であった。また、回帰分析からは、薬剤のほかPIMs数や医師数のオッズ比が大きく、PIMsリストの有用性と医師数の増加が多剤処方の要因であることも明らかとなった。</p> <p>本研究は本学およびデータ提供機関の倫理審査の承認を得て実施されており、研究方法においても倫理的配慮がなされていた。研究方法、論証、論文形式において適切であった。</p> <p>本研究の新規性は、これまでに例のない多数症例を対象として、多剤服用に至る9種類の薬剤処方パターンを見出したことで、特に処方箋のみから服薬指導をする薬局薬剤師にとって処方薬剤の適正化に貢献するものとして高く評価できる。</p> <p>2. 審査経過</p> <p>審査会は2回開催した。初回は、対象薬剤についてのより詳細な情報、論文で使用されている用語の定義の明確化、統計学的手法についての詳細な説明、本研究の結果の活用方法などについて質疑、指摘があり、加筆修正を求めた。2回目は、初回で指摘した事項が反映されているか確認した。その結果、適切に加筆修正されたことを審査員全員で確認した。</p> <p>3. 口頭試問</p> <p>2回の口頭試問において適切に応答した。</p> <p>以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文の著者に博士(医療福祉経営学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p>主 査 斎藤 恵一</p> <p>副 査 百瀬 泰行</p> <p>副 査 丸木 一成</p>		